In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	社会的排除が対人記憶に及ぼす影響 : 対人不安特性との関連
Author	田中, 宏明 / 池上, 知子
Citation	人文研究. 65 巻, p.63-80.
Issue Date	2014-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	堀内達夫教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第65巻　2014年3月　63頁～80頁

社会的排除が対人記憶に及ぼす影響：対人不安特性との関連

田中宏明　池上知子

先行研究では、社会的排除を受けた人は、所属欲求を再充足するように動機づけられるという社会的再結合仮説が提唱されており、排除を受けることで、認知過程や対人行動において向社会的な変容が生じることが明らかになっている。一方で、対人不安特性の高い個人においては、そのような向社会的な変容が生じないことも報告されている。本研究では、排除による所属欲求の充足度の低下が対人記憶に及ぼす影響においても、対人不安特性の高低による差異がみられるかを検討した。実験参加者に他者から排除された経験、または、平均的な一日の日課について記述するように求めた後、参加者と相互作用することを想定した架空の人物についての、社会的受容のサインと社会的脅威のサインを含んだ紹介文を読んで印象を形成してもらう課題を行った。その結果、対人不安特性の高低に関わりなく、排除経験を想起すると新たな他者の社会的脅威のサインが記憶されにくくなることが示された。この結果は、社会的再結合仮説を間接的に支持するものと考えられるが、対人不安特性の調整効果は認められなかった。この原因は、先行研究との方法論上の違いにあると考察した。

集団に所属することは、外敵から身を守り、食糧や繁殖のパートナーを獲得する上で有利に働くため、人類の進化の過程において、他個体と共に行動する傾向のある個体は、単独で行動する傾向のある個体よりも生存確率が高く、多くの子孫を残したと Baumeister & Leary (1995) は述べている。そして、このような自然淘汰の過程を経て、人間は基本的欲求の一つとして、他者との間に安定した強固な関係を形成、維持しようとする所属欲求を持つようになったと彼らは推察している。Baumeister & Leary (1995) は、基本的な欲求の基準として複数の基準を設けており、その中には次のようなものが含まれる。まず、欲求の充足度が基準値を下回った場合は、その欲求を充足するように動機づけられ、基準値が達成された場合は、その動機は消失する。また、基本的な欲求に基づく動機は認知過程と感情に影響を与える。そのため、基本的な欲求に関連する重要な情報は認知的処理の対象となりやすい。

社会的排除は、この所属欲求の充足を阻害すると考えられている。社会的排除とは、ある個人または集団を社会的状況の外に置き続けることを意味する（Williams, Wesselmann, & Chen, 2007)。これまでの研究において、さまざまな実験的手法を用い参加者に対して社会的排除の操作を行い、一時的に所属欲求の充足が阻害された場合に、人々がどのような反応を示すかについて検討がなされてきた。Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller (2007) は、社

会的排除を受け所属欲求が脅かされた者は、社会的つながりを再構築するように動機づけられるという、社会的再結合仮説（social reconnection hypothesis）を提唱している。この仮説は、基本的欲求の充足が阻害された場合は、その欲求を再充足しようとする動機が高まるという Baumeister & Leary (1995) の考えに沿ったものである。Maner, DeWall, et al. (2007) では、排除操作により所属欲求の充足を阻害された者は、次に行う課題を一人で遂行するより数名のパートナーと行うことを希望し、他者との接触願望が高まることが報告されている。

所属欲求が認知過程に及ぼす影響

さらに、所属欲求を充足しようとする動機が高まるのに伴って、認知過程に変容が生じることも Maner, DeWall, et al. (2007) は報告している。実験パートナーとビデオメッセージを交換した後、相手から直接会うことを拒絶された参加者は、新たに紹介された別の実験パートナーの印象を好意的に評価した。このような認知的変容は、社会的つながりの形成を促進するように機能していると考えられている。また、彼らの実験では、行動指標においても向社会的な変容が生じることが確認されており、排除操作を受けることで、新たな実験パートナーと報酬を分配する課題において、パートナーに対して報酬を多く分配するようになることが示されている。これらの結果は、社会的再結合仮説を支持するものである。

社会的排除を受けることで、印象形成の他に注意や記憶などの、幅広い認知過程において変容が生じることも明らかになっている。注意は、周囲の環境の中から情報を選別する過程であり、高次の認知や行動の基盤を成すものと考えられている。そして、これまでの研究では、活性化している動機に関連する刺激に対して、選択的に注意が向けられることが明らかになっている。例えば、Maner, Gailliot, Rouby, & Miller (2007) では、配偶者探索動機を活性化させることで、身体的魅力の高い異性に注意が向けられやすくなることが示されている。

所属欲求を充足しようとする動機が注意に与える影響について検討した研究として、DeWall, Maner, & Rouby (2009) がある。彼らは、社会的排除を受けた場合に、所属欲求を再充足しようとする動機が高まり、笑顔のような好意的な対人的意図を伝達する社会的受容のサインに対して、選択的に注意が向けられるかどうかを検証した。数種類の表情の顔刺激を呈示し、アイトラッカーを用いて注意が向けられていた位置を測定し、各表情に注目していた時間の長さについて分析したところ、排除を受けた参加者は笑顔により長く注目するようになることが示された。この結果は、排除操作を受けることで、対人認知過程における、より基礎的な段階においても向社会的な変容がみられ、社会的受容のサインに対して選択的に注意が向けられるようになることを示している。

また、社会的排除が記憶に与える影響についても検討がなされている。Gardner, Pickett, & Brewer (2000) は、先行研究の結果から、個人の中で活性化している動機に関連する情報が選択的に処理され、記憶されると論じている。例えば、Atkinson & McClelland (1948) は、

身体的空腹が食べ物の手がかりに対して注意を向けさせ、選択的な記憶を生じさせることを示している。また、Higgins & Tykocinski (1992) は、個人のセルフガイドが記憶に影響を与えることを見出している。自己乖離理論（self-discrepancy theory）では、自己または他者が自己が実際に持っていると信じている特性の表象である現実自己と、目標となる自己の表象であるセルフガイドが区別され、さらにセルフガイドは、自己または他者が自己が持つことを理想としている特性の表象である理想自己と、自己または他者が自己が持つべきだと信じている特性の表象である義務自己に区別される（Higgins, 1987; Higgins & Tykocinski, 1992）。現実自己と義務自己が乖離し、損失を回避するように動機づけられている個人は、他者の日記を呈示され、その内容を再生する課題において、損失に特徴づけられるネガティブな出来事と、損失の回避に特徴づけられるポジティブな出来事を多く再生した。一方、同じ課題において、現実自己と理想自己が乖離し、獲得を予想している個人は、獲得に特徴づけられるポジティブな出来事と、獲得の失敗に特徴づけられるネガティブな出来事を記憶することが示されている（Higgins & Tykocinski, 1992）。

Gardner et al. (2000) は、所属欲求の充足が阻害された状況において、認知過程に変容が生じ、社会的な出来事が選択的に記憶されることを明らかにしている。彼女らの実験では、排除操作により一時的に所属欲求の充足度を低下させた後、Higgins & Tykocinski (1992) が使用したパラダイムを参考に、個人的な出来事と社会的な出来事を含んだ他者の日記を呈示し、どの出来事が記憶されるかを検討した。個人的な出来事としては、宝くじを買って当選した、散髪に行ったが気に入った髪型にならなかったといった出来事が含まれ、社会的な出来事としては、友人と外出し、楽しい一時を過ごした、親友が自分との約束を守らなかったといった出来事が含まれていた。その結果、排除操作を受けた参加者は、出来事がポジティブであるかネガティブであるかに関わらず、社会的出来事をより多く再生し、社会的排除を受けることで、社会的な情報が選択的に記憶されるようになることが示された。

対人不安特性の調整効果

Maner, DeWall, et al. (2007) は、社会的排除を受けた者が、社会的再結合仮説が予測するような他者との社会的つながりを再構築しようとする反応（以下、再結合反応）を示すのは、排除を受けた者が他者と社会的つながりを形成することができると知覚した場合に限定され、必ずしも常に再結合反応がみられるわけではないことを明らかにしている。例えば、実験パートナーを評価する課題において、評価対象が実験参加者を排除した加害者であった場合、評価対象者との現実的な接触が期待されない場合、また、排除を受けた者の対人不安特性が高い場合は、排除操作を受けた者が、相手を好意的に評価し、報酬を多く分配するという反応は示されなかった。

対人不安（social anxiety）は、「現実の、あるいは想像上の対人状況において、個人的に評

価されたり、評価されることが予想されることから生じる不安」と定義される（Schlenker & Leary, 1982）。対人不安の経験のしやすさには個人差があり、対人不安を経験する傾向の強さは、対人不安特性（trait social anxiety）と呼ばれる（Leary, 1983 生和訳 1990）。なお、対人不安特性と臨床群における社交不安障害（social anxiety disorder）の間に質的な違いはないと考えられている（Leary & Kowalski, 1995）。

Clark & Wells (1995) の対人不安の認知モデルによると、高対人不安者は、“自分には魅力がない”、“自分は愚かだ”といった自己についてのネガティブな信念、“もし、自分が間違いをすると他者は自分を拒絶するだろう”、“もし、他者が本当の自分を知ると自分を嫌いになるだろう”といった他者からの評価についての信念、“すべての人の賛同を得なくてはならない”、“弱みを見せてはいけない”といった極度に高い対人行動についての基準を持っている。そのため、高対人不安者は、対人状況において他者から否定的に評価される可能性を高く推測し、自己防衛への関心を強め、その結果、対人的接触を回避したり、アイコンタクトや自己開示の回避といった安全確保行動をとるようになると考えられている（Alden & Bieling, 1998; Clark & Wells, 1995）。

Maner, DeWall, et al. (2007) が見出した、高対人不安者は社会的排除を受けた後、報酬分配課題において、新たな実験パートナーに対して報酬を多く分配しないという結果は、同様の実験手続きを用いた、Mallott, Maner, DeWall, & Schmidt (2009) においても再現されている。さらに、Mallott et al. (2009) は、排除を受けた後の対人状況における非言語的行動において、向社会的な変容がみられるかを検討するため、排除操作の後に参加者の新たな実験パートナーに向けたビデオメッセージを撮影し、それを他の実験者が評定している。評定は、アイコンタクトを適度に維持しているか（視線の質）、話し方の抑揚と明確さが適切なものか（声の質）について行われた。その結果、排除操作を受けることで、低対人不安者の視線と声の質は向上したが、高対人不安者の視線の質は悪化し、対人不安特性が非常に高い者の場合は、声の質も悪化することが示された。この結果は、低対人不安者においては社会的再結合仮説が予測するような向社会的変容が生じるが、高対人不安者においてはそのような変容が生じないことを示している。

社会的排除の操作を受けた後に、高対人不安者が再結合反応を示さないことについて、Mallott et al. (2009)、Maner, DeWall, et al. (2007) では、以下のように考察されている。社会的排除を経験することで、高対人不安者は元々持っている対人的接触についてのネガティブな予測を確証し、新たな社会的接触を社会的つながりを形成する機会というよりも、さらなる脅威と捉える。そのため、高対人不安者においては、社会的脅威から自己を防衛しようとする動機が、新たな社会的つながりを形成しようとする動機を上回ると考えられている（Mallott et al., 2009; Maner, DeWall, et al., 2007）。Mallott et al. (2009) は、高対人不安者は新たな社会的排除を警戒するあまり、アイコンタクトの維持等の最低限の向社会的行動を維持しよう

としなくなると考えている。

本研究

先行研究では、社会的排除の操作を受けた後、新たな他者に対する印象評定や対人行動において、対人不安特性の調整効果がみられることが示されているが（Maner, DeWall, et al., 2007)、その他の対人認知過程、他者に向けられる注意や他者に関する記憶（対人記憶）において、対人不安特性による調整効果がみられるかどうかは検討されていない。Maner, DeWall, et al. (2007)、Mallott et al. (2009) によると、社会的排除を受けた後、低対人不安者は新たな社会的つながりを再構築しようとする目標（以下、再結合目標）を優先するのに対して、高対人不安者は社会的脅威から自己を防衛しようとする目標（以下、自己防衛目標）を優先すると考えられる。また、先行研究では、目標に関連する刺激に対して選択的に注意が向けられ(e.g., Maner, Gailliot, et al., 2007)、記憶されると考えられている（Gardner et al., 2000)。これらの知見に基づくと、Maner, DeWall, et al. (2007) が検討した、他者に対する評価以外の対人認知過程においても、対人不安特性の高低による差異がみられるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、社会的排除が対人記憶に及ぼす影響においても、対人不安特性の高低による差異が見られるかどうかを検討することにした。社会的排除を受けた後、低対人不安者は再結合目標を優先するために、この目標と関連する他者の示す社会的受容のサインに注目し、選択的に記憶するのに対して、高対人不安者は自己防衛目標を優先するために、社会的脅威のサインに注目し、選択的に記憶すると予測した。

先述したように、実験参加者に対して行う社会的排除の操作はさまざま考案されている。実験のパートナーから拒否的メッセージを受け取る（e.g., Maner, DeWall, et al., 2007)、ボールパスゲームで無視される（e.g., Williams, Cheung, & Choi, 2000）など直接的な操作を行うこともあれば、他者から排除された過去の経験を想起し、記述するように求める方法を用いることもある。Maner, DeWall, et al. (2007) は、大学生を対象とした実験で、他者から排除された経験を想起させることで、直接的な排除操作を用いた場合と同様に、他者との接触願望が高まることを示している。本研究では、想起法による社会的排除の操作を行った後、新たな他者についての社会的受容のサインと社会的脅威のサインを含んだ紹介文を読んで印象を形成させ、どちらの項目が多く再生されるかを検討した。なお、実験参加者は、Maner, DeWall, et al. (2007) と同様に大学生とした。これは、彼らの結果との比較を容易にするためと、大学生は比較的均質な集団であり、実験条件への割り当てを行いやすいためである。

本研究では、社会的受容と脅威のサインとして、矢田・池上（2012）が用いた温かさと冷たさを示す行動項目を使用した。Cuddy, Fiske, & Glick (2008) によると、人の他者に対する評価は温かさと有能性の二次元に大別することができる。温かさの次元には、道徳性、親切さ、

友好性などの特性が含まれ、有能性の次元には、有能性、自信、知性などの特性が含まれる。なお、研究者によって、各次元の命名の仕方は異なるが、それらが指すものは共通していると考えられている。温かさに関する特性は、その特性を持つ人物が周囲の人物にとって有益かどうかに関わる特性であり、その特性を持つ人物の目標が周囲の人にとって有益なものか有害なものであるかを表し、一方、有能性はその特性を持つ本人にとって有益かどうかに関わる特性だと考えられている（Wojciszke, 2005）。Fiske, Cuddy, & Glick (2006) は、人の他者に対する評価がこのような構造を持つのは、他者や外集団の持つ意図を判断した後、彼らが意図を実行に移す能力を持つかどうかを判断することが、進化の過程において適応的であったためと考えている。

Reeder, Kumar, Hesson-McInnis, & Trafimow (2002) は、他者が持っていると推測された動機が、その人物の道徳性（温かさ）についての推測に影響を与えることを示している。例えば、利己的な動機から攻撃行動を起こしたと推測された人物の道徳性は低く評価された。そこで本研究では、温かさを示す行動項目から好意的な動機を、冷たさを示す行動項目からは非好意的動機を推測することができると考え、温かさを示す行動項目を社会的受容の可能性を示すサイン、冷たさを示す行動項目を社会的脅威のサインとして用いることにした。

また、排除操作を受けた後の対人記憶とともに、新たな他者に対する印象評定と対人的動機についても補足的に検討を行うことにした。対人的動機とは、特定の相手に対する関係形成・維持・回避に関わる動機のことである（高木、2000）。Maner, DeWall, et al. (2007) に基づき、排除操作を受けた後、低対人不安者は新たな他者を好意的に評価し、接近しようとするのに対して、高対人不安者は新たな他者を好意的に評価せず、接近しようとしないと予測した。Maner, DeWall, et al. (2007) では、排除を受けた後の新たな他者についての印象評定と向社会的行動について検討する際、直接的な排除操作を用いているが、本研究では、間接的な排除操作を用いた場合にも同様の結果がみられるかを検討する。本研究での作業仮説を以下にまとめた。なお、本研究において主な検討の対象となる仮説は仮説1、2である。

仮説1. 排除操作を受けることで、低対人不安者は新たな他者についての紹介文に含まれる温かさを示す行動項目を多く、冷たさを示す行動項目を少なく再生する。

仮説2. 排除操作を受けることで、高対人不安者は新たな他者についての紹介文に含まれる冷たさを示す行動項目を多く、温かさを示す行動項目を少なく再生する。

仮説3. 排除操作を受けることで、低対人不安者は新たな他者を好意的に評価し、接近しようとする。

仮説4. 排除操作を受けることで、高対人不安者は新たな他者を好意的に評価せず、接近しようとしなくなる。

なお、新たな他者についての対人記憶、印象評定、対人的動機についての分析では、気分の影響を統制した場合の結果についても検討することにした。先行研究（Maner, DeWall, et al., 2007）では、分析の結果がネガティブな出来事を経験し、気分が悪化したことによるものではなく、受容水準が低下したためであることを示すため、気分の得点を共変量として説明変数に加えた検討も行っており、本研究でもこれに倣うことにした。

方法

参加者

大学生 157 名（男性 85 名、女性 72 名、平均年齢 19.53 歳、SD=1.16）が実験に参加した。

手続き

大学の心理学関連の授業時間の一部を利用して、集団による質問紙実験を実施した。参加者には、大学生の人間関係を調べることを目的とした調査であると説明し、質問紙への回答を求めた。回答の前に、この調査への回答は個人の自由意志に基づくものであり、回答を中止したくなった場合はいつでも中止できることを参加者に説明した。質問紙は以下の順に構成され、実験実施者の指示に従って回答するように求めた。

対人不安特性の高さの測定　短縮版 FNE 尺度（笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野、2004）を使用した。この尺度は、高対人不安者の認知の中核的な特徴である、他者からの否定的な評価に対する恐れを測定するものである。12 項目から成り、5 件法で回答を求めている。得点が高いほど対人不安特性が高いことを示す。

排除操作　排除条件の参加者に対しては、他者から排除された経験をできるだけ多く想起し、その出来事を箇条書きにするように求めた。具体的には、「日常生活で、みんなの中で孤立したり、疎外感を感じた経験」をいくつか思い出し、その内容を記述するように教示した。参加者が回答を行いやすいように、「どういうわけか、自分にだけ遊びに行く誘いがかからなかった」、「学校のクラスでペアを組んだりグループ分けをする時に、自分だけ残ってしまった」といった回答例を質問紙に示した。統制条件の参加者に対しては、平均的な一日の日課について記述するように求めた。回答の制限時間は 4 分間とした。

操作チェック　Williams (2009) によると、社会的排除を受けることで、所属、自尊、統制、存在の 4 つの基本的欲求の充足が阻害され、気分が悪化する。そこで、排除操作の有効性を確認するために、Williams (2009) の考案した欲求の充足度および気分を測定する尺度への回答を求めた。日本人学生が回答しやすいように、適宜修正を加えて邦訳した尺度を用いた。欲求の充足度を測定する項目を各 3 項目ずつ、気分を尋ねる項目を 3 項目、計 15 項目を使用し、7 件法で回答を求めた。

新たな他者の紹介文の呈示　排除を受けた後の、新たな他者に対する対人記憶、印象評定、

対人的動機について検討するため、アルバイト先で、新しい同僚と働くことになった場面を想定し、参加者と同じ性別の新しい同僚（名前はイニシャルのみ呈示、A.S.）についての紹介文を読むように求めた。紹介文は、矢田・池上（2012）の行った予備調査を参考に、温かさを示す行動項目と冷たさを示す行動項目各6項目ずつ、および中立的な行動項目8項目の計20項目から構成された。

矢田・池上（2012）では、いくつかの行動項目を参加者に呈示し、その行動の有能性と温かさについて評価させ、平均値が尺度の中点よりも有意に高い項目を温かさを示す行動項目、中点よりも有意に低い項目を冷たさを示す行動項目としている。矢田・池上（2012）では、有能性に関する次元についても同様の分析を行っているが、本研究では有能性の次元を考慮しないことから、有能性の高さにおいて中点と有意差がない項目だけを選出した。順序効果を相殺するために、紹介文を前半部分と後半部分に分け、配布した冊子の半分は前半部分と後半部分の順番を入れ替えたものにした。使用した紹介文は付録に示した。

ディストラクション課題　ディストラクション課題として、1000から3を引き、さらにその差から3を引くことを続ける計算問題を3分間行うように求めた。

紹介文の内容を想起する課題　先に読んだ紹介文の内容をできるだけ多く想起し、箇条書きにするように求めた。回答の制限時間は3分間とした。

印象評定　紹介文で紹介された新たな他者に対してどのような印象を抱いたかを調べるために、矢田・池上（2012）が他者の「温かさ」を評定するのに使用した項目10項目に、フィラー項目6項目を加えた、計16項目を使用した。回答は7件法で求めた。

対人的動機　高木（2003）の対人的動機を測定する尺度を使用した。この尺度は、「回避」「接近」「維持」の3因子から構成される。このうち「維持」因子は、項目内容からみて、他者に対して接近しようとも回避しようともせず、現在の関係を維持しようとする対人的動機に対応するものと考えられるため、本研究では「現状維持」因子と呼ぶことにした[1]。本研究では、高木（2003）において、それぞれの因子に負荷を示した項目を各3項目ずつ、計9項目を選び出し、使用した。一部の項目は、本研究の目的に適するように表現を変更して使用した（「一緒にいたくない」を「一緒にバイトをしたくない」に、「もっと知りたい」を「もっとA.S.のことを知りたい」に変更した）。

デブリーフィング　質問紙への回答が終了した後、実験参加者に対して、この実験の本来の目的を説明し、最初に詳しい説明を行わなかったことについて謝罪した。

結果

予備的分析

社会的排除の操作で参加者が記述した内容の適切性について、実験者と別の評定者が独立に

チェックした。評定者に対しては、参加者に呈示した教示内容と回答例を示し、参加者の回答が教示に則したものであるかを判断するように求めた。排除条件の参加者が想起した内容についての、評定者間の判断の一致率を算出したところ、一致率は80.1%であった。また、統制条件の参加者が記述した内容について、平均的な一日の日課を記述しているかどうか判断を行ったところ、評定者間の判断の一致率は98.6%であった。評定者間の判断が不一致であった項目については、合議の上決定した。合議は教示内容を参照して行った。

次に、新たな他者についての紹介文の内容について、参加者が再生した内容の正誤を実験者と別の評定者が独立に判断した。紹介文の内容と一語一句合致していなくても、意味内容が原文と概ね一致している場合は正答とした。評定者間の一致率は94.3%であり、不一致の項目については合議のうえ正誤を決定した。

排除条件の参加者で集団からの排除に当てはまる経験を一つも想起していなかった9名と、新たな他者についての紹介文の内容を再生する課題で内容を正しく再生した項目数が0であった2名、その他の回答項目で欠損値のあった19名のデータを分析から除外した。最終的な分析対象は127名となった。

分析対象者における短縮版FNE尺度の信頼性は$\alpha=.93$であり、平均得点は3.47（$SD=0.82$）であった。統制条件（$M=3.48$, $SD=0.76$）と排除条件（$M=3.44$, $SD=0.91$）の得点の間に有意差はみられなかった（$t(125)=0.24$, *ns*）。

操作チェック

次に、実験操作の有効性の確認を行った。排除条件と統制条件の欲求の充足度と気分の平均値と標準偏差を表1に示した。両条件の得点についてt検定を行ったが、いずれの変数においても条件間に有意差は確認されず、実験操作の有効性は示されなかった。ただし、自己報告による心的状態の測定には限界があることも指摘されている。回答者の側に社会的に望ましい回答をしようとする構えが働きやすく、回答が意図的に歪められ、必ずしも正確な結果が得られ

表1. 各条件の操作チェック項目の得点

	統制条件（$n=73$）		排除条件（$n=54$）		$t(125)$	
欲求の充足度						
所属（α=.67）	4.95	(0.98)	5.02	(1.03)	0.36	*ns*
自尊（α=.77）	3.82	(1.33)	3.86	(1.45)	0.16	*ns*
存在（α=.81）	4.25	(1.24)	4.35	(1.32)	0.41	*ns*
統制（α=.79）	3.59	(1.15)	3.84	(1.25)	1.17	*ns*
気分（α=.83）	4.07	(1.04)	3.85	(1.12)	1.12	*ns*

Note. 括弧内の値は*SD*。欲求充足度の得点は、数値が低いほど充足度が低下していることを示し、気分の得点は、数値が低いほど気分が悪化していることを示す。

ない場合があるからである（村上、2009）。したがって、本研究の結果も、操作自体が有効でなかったのか、測定方法に問題があったのかが明らかでないため、仮説の検討のための分析を進めることとした。

対人記憶についての分析

新たな他者についての紹介文の内容を再生する課題において、参加者が再生した温かさを示す行動項目、冷たさを示す行動項目の占める割合について、分析を行った。Gardner et al.（2000）では、認知能力の個人差を統制するために、各項目の再生数を再生した項目の総数で除して、各項目の占める割合を算出し、分析に用いている。本研究でも、Gardner et al.（2000）に倣い、温かさを示す行動項目、冷たさを示す行動項目、中立的な行動項目の占める割合を算出した。これらの値を逆正弦変換した値について[2)]、排除操作、対人不安特性を説明変数とする重回帰分析を行った。排除条件を 0.5、統制条件を－0.5 とするコントラスト変数を設定し、対人不安特性の値は中心化した得点を使用した。また、気分を共変量として説明変数に加えた場合の結果についても検討するため、気分を測定する項目の得点を中心化した値を使用した。

まず、気分を共変量として加えなかった場合の結果について述べる。階層的重回帰分析を行い、Step1 で排除操作と対人不安特性の主効果、Step2 で排除操作と対人不安特性の交互作用項を投入した。分析結果を表 2 に、この回帰式（Step1）に基づく各項目の占める割合の推定値を図 1 に示した。なお、図 1 に示した値は分析に使用した逆正弦変換した値を、割合に変換し直した値である。分析の結果、冷たさを示す行動項目と中立的な行動項目の割合において、排除操作の効果が有意であった。排除操作を受けることで、冷たさを示す行動項目の占める割合が低下し、中立的な行動項目の割合が増加することが示された。しかし、排除操作と対人不安特性の交互作用は有意ではなく、排除操作の影響に対する対人不安特性の調整効果は認めら

表 2. 再生した項目の割合についての重回帰分析

	温かさ割合			冷たさ割合			中立割合		
	B	*SE*	β	*B*	*SE*	β	*B*	*SE*	β
（切片）	31.04	0.60		40.46	0.81		33.42	0.85	
排除操作	0.58	1.19	0.04	−4.05	1.63	−0.22 *	4.17	1.70	0.22*
対人不安	−1.09	0.72	−0.14	0.44	0.98	0.04	0.72	1.03	0.06
排除操作×対人不安									
Adj R^2	0.01			0.03*			0.03*		
ΔR^2 (Step1→Step2)	0.00			0.00			0.00		

Note. ** $p<.01$, * $p<.05$, † $.05<p<.10$
数値は Step1 の回帰式における値を示す。

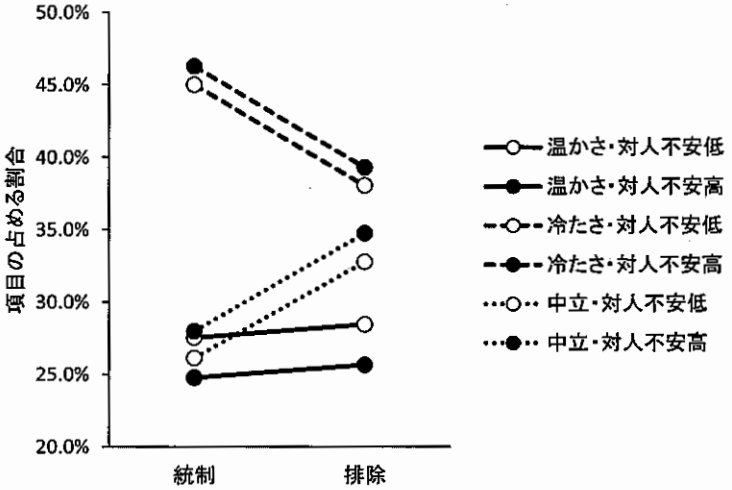

図 1. 各項目の占める割合の推定値

表 3. 再生した項目の割合についての重回帰分析（共変量を含めた場合）

	温かさ割合			冷たさ割合			中立割合		
	B	*SE*	β	*B*	*SE*	β	*B*	*SE*	β
（切片）	31.02	0.59		40.44	0.81		33.45	0.84	
排除操作	0.42	1.19	0.03	−4.26	1.63	−0.23*	4.55	1.69	0.23**
対人不安	−1.26	0.73	−0.16†	0.24	0.99	0.02	1.10	1.03	0.09
気分	−0.73	0.56	−0.12	−0.93	0.76	−0.11	1.69	0.79	0.19*
排除操作×対人不安									
Adj R^2	0.01			0.04 †			0.06*		
ΔR^2(Step1→Step2)	0.00			0.00			0.00		

Note. ** $p<.01$, * $p<.05$, † $.05<p<.10$
数値は Step1 の回帰式における値を示す。

れなかった。温かさを示す行動項目の占める割合では、有意な主効果、交互作用はみられず、モデルは有意とならなかった。

次に、気分を共変量として分析に加えた場合の結果について述べる。階層的重回帰分析を行い、Step1 で排除操作と対人不安特性、気分の主効果、Step2 で排除操作と対人不安特性の交互作用項を投入した。分析結果を表 3 に示した。気分を共変量として加えることで、結果に大きな変化はみられず、中立的な行動項目の占める割合では気分の効果が有意となったものの、冷たさを示す行動項目と中立的な行動項目の占める割合のいずれにおいても、排除操作の効果は有意なままであった。冷たさを示す行動項目の占める割合の減少と、中立的な行動の占める割合の増加は、気分の影響によるものではなく、排除操作の影響であることが示されたといえる。

印象評定と対人的動機

次に、紹介文で呈示した新たな他者についての印象評定と対人的動機について分析を行った。温かさを評定する項目10項目の信頼性は$\alpha=.83$であった。得点が高いほど温かいと評価していることを示す。対人的動機を測定する尺度の信頼性は、下位尺度ごとに、「接近」が$\alpha=.80$、「回避」が$\alpha=.87$、「現状維持」が$\alpha=.75$であった。「接近」と「回避」の間には、$r=-.67$ ($p<.01$) と比較的高い負の相関がみられたため、「回避」の得点を逆転して「接近」の得点に足し合わせ、「接近・非回避」の得点を算出した（$\alpha=.88$)。得点が高いほど、新たな他者に接近しようとする動機が強いことを示す。対人記憶の分析と同様に、印象評定と対人的動機の得点について、排除操作と対人不安特性を説明変数とする重回帰分析と、これに気分を共変量として説明変数に加えた分析を行った。先の分析と同様に、排除操作はコントラスト変数を使用し、対人不安特性と気分の値は中心化した値を用いた。

まず、排除操作と対人不安特性を説明変数とする重回帰分析の結果を述べる。Step1で排除操作と対人不安特性の主効果を、Step2で排除操作と対人不安特性の交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行った。分析結果を表4に示した。対人的動機の「現状維持」の得点において、対人不安特性の効果が有意であり、対人不安特性が高い者ほど、紹介文に呈示された新たな他者との心理的距離を維持しようとする傾向がみられた。しかし、排除操作の主効果と排除操作と対人不安特性の交互作用は有意ではなかった。印象評定と対人的動機の「接近・非回避」においては、排除操作、対人不安特性の効果と、排除操作と対人不安特性の交互作用は、いずれも有意ではなかった。

次に、気分を共変量として説明変数に加えた場合の結果について報告する。Step1で、排除操作、対人不安特性、気分の主効果を投入し、Step2で排除操作と対人不安特性の交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行った。分析結果を表5に示した。対人的動機の「現状維持」

表4. 印象評定と対人的動機についての重回帰分析

	印象評定			接近・非回避			現状維持		
	B	*SE*	β	*B*	*SE*	β	*B*	*SE*	β
(切片)	3.52	0.07		4.09	0.10		4.79	0.10	
排除操作	−0.05	0.14	−0.03	0.02	0.21	0.01	0.13	0.20	0.06
対人不安	0.15	0.08	0.16†	0.11	0.13	0.08	0.36	0.12	0.26**
排除操作×対人不安									
Adj R^2	0.01			−0.01			0.06**		
ΔR^2(Step1→Step2)	0.00			0.00			0.01		

Note. ** $p<.01$, * $p<.05$, † $.05<p<.10$
数値はStep1の回帰式における値を示す。

表 5. 印象評定と対人的動機についての重回帰分析（共変量を含めた場合）

	印象評定			接近・非回避			現状維持		
	B	*SE*	β	*B*	*SE*	β	*B*	*SE*	β
（切片）	3.52	0.07		4.09	0.10		4.79	0.10	
排除操作	−0.05	0.14	−0.03	0.04	0.21	0.02	0.15	0.20	0.07
対人不安	0.16	0.09	0.16†	0.12	0.13	0.09	0.38	0.12	0.28**
気分	0.01	0.07	0.01	0.08	0.10	0.07	0.09	0.09	0.08
排除操作 ×対人不安									
Adj R^2	0.00			−0.01			0.06*		
ΔR^2(Step1 →Step2)	0.00			0.00			0.01		

Note. ** $p<.01$, * $p<.05$, † $.05<p<.10$
数値は Step1 の回帰式における値を示す。

でみられた対人不安特性の効果は有意なままであり、気分の効果は有意でなかった。印象評定と対人的動機の「接近・非回避」においても、気分を共変量に加えることで、結果に大きな変化はみられなかった。

考察

社会的排除を受けた後の、新たな他者に対する印象評定や対人的行動を検討した先行研究では、対人不安特性の高低による反応の差異がみられることが示されてきたが、排除を受けた後の対人記憶においても対人不安特性の高低による差異が見られるかどうかは明らかにされておらず、本研究ではこの点について検討を行った。社会的排除を受けた後、低対人不安者においては新たな社会的つながりを再構築しようとする目標（再結合目標）が活性化するのに対して、高対人不安者は対人的接触についてのネガティブな予測を確証するために、再結合目標よりも自己防衛目標を優先すると考えられている（Mallott et al., 2009; Maner, DeWall, et al., 2007）。また、これらの目標に関連した刺激に対して注意が向けられ（e.g., Maner, Gailliot, et al., 2007）、記憶されることから（Gardner et al., 2000）、排除により所属欲求が脅かされると、低対人不安者は、新たな他者の示す社会的受容のサイン（温かさを示す行動項目）を多く、社会的脅威のサイン（冷たさを示す行動項目）を少なく再生するのに対して（仮説 1）、高対人不安者は、温かさを示す行動項目を少なく、冷たさを示す行動項目を多く再生すると予測した（仮説 2）。

実験の結果、対人不安特性の高低に関わらず、排除操作を受けることで冷たさを示す行動項目の再生総数に占める割合が減少し、中立的な行動項目の割合が増加した。気分の得点を共変

量に加え、その影響を統制した場合にも同様の結果がみられ、これはネガティブな気分の影響ではなく、排除を受けた過去の経験を想起したことによるものと考えられた。この結果は、社会的排除を受けた過去の経験の想起により所属欲求の充足度が低下したために、社会的つながりを再構築しようとする動機が高まり、新たな他者の社会的脅威のサインへの注意が抑制され記憶されにくくなったと解釈できる。したがって、社会的再結合仮説と少なくとも矛盾しない結果であるといえる。よって、低対人不安者は排除操作を受けることで、冷たさを示す行動項目を少なく再生するという、仮説1の後半部分のみが支持された。ただし、排除を受けた後の選択的注意について検討したDeWall et al. (2009) では、排除操作を受けた参加者は社会的受容のサインである笑顔に注意を向けることを示しており、本研究の結果と完全に整合するわけではない。本研究では、排除された経験を想起することによって、新たな他者の温かさを示す行動項目の再生率が上昇していないからである。DeWall et al. (2009) では、対人認知過程の初期段階の認知である選択的注意を検討対象としているのに対して、本研究の場合は、比較的後期の段階の認知である選択的記憶に焦点を当てていることを考慮すると、社会的排除が認知に与える影響も一様ではなく、認知過程の段階に応じて微妙に異なるのかもしれない。

一方で、対人不安特性の高低による差異はみられず、排除操作を受けた後、高対人不安者は温かさを示す行動項目を少なく、冷たさを示す行動項目を多く再生するという仮説2は支持されなかった。Maner, DeWall, et al. (2007) では、新たな他者に対する印象評定と向社会的行動の生起において、対人不安特性の高低による差異がみられ、高対人不安者は新たな他者を好意的に評価せず、向社会的な行動を示さないことが明らかにされている。しかし、本研究で観測された、過去の排除経験を想起した後の対人記憶における高対人不安者の反応は、Maner, DeWall, et al. (2007) が見出した、対人評価と向社会的行動についての知見と乖離するものであった。

また、本研究では対人記憶とともに、新たな他者に対する印象評定と対人的動機についても検討を行った。しかし、印象評定と対人的動機のいずれにおいても、排除操作の影響と、それに対する対人不安特性の調整効果はみられなかった。Maner, DeWall, et al. (2007) が示した結果は再現されず、仮説3、4ともに支持されなかった。

本研究において仮説1から4が支持されなかった原因として、Maner, DeWall, et al. (2007) が対人不安特性の調整効果を示した実験と、本研究の実験の方法論上の違いが考えられる。Maner, DeWall, et al. (2007) は、ビデオメッセージを交換した相手から会うことを拒絶されるという直接的な操作方法を用いているのに対し、本研究では他者から排除された経験を想起するという間接的な方法を用いている。他者から排除された経験を想起する方法は、直接的な排除操作と同様の効果を持つと考えられているが（Maner, DeWall, et al., 2007)、過去の経験は個人によって意味づけられ、整理されているのに対して、新たに生じた排除はそのような

処理をされておらず、直接的な排除操作と間接的な操作では、参加者に与える影響が異なる可能性も指摘されている（Baumeister, Brewer, Tice, & Twenge, 2007）。

また、Maner, DeWall, et al.（2007）における印象評定の対象は、参加者が実在すると認識している相手であるのに対して、本研究では場面想定法を用い、架空の相手に対する対人記憶、印象評定、対人的動機を測定している。Maner, DeWall, et al.（2007）は、社会的排除を受けた人が再結合反応を示すのは、その他者と実際に社会的つながりを再構築できると認識した場合に限られると述べており、本研究の場合、排除操作を受けたことで所属欲求を再充足しようとする動機が高まっていたとしても、架空の人物に対して、好意的な評価や、接近しようとする対人的動機は生じなかったのではないかと考えられる。また、Maner, DeWall, et al.（2007）とは異なり、本研究では新たな他者についての情報として、社会的脅威のサイン（冷たさを示す行動）が明示的に呈示されている点にも留意する必要がある。Maner, DeWall, et al.（2007）では、新たな他者の特性に関する明確な情報は与えられなかったため参加者の願望が反映されやすかったとも考えられる。これに対し、本研究では否定的内容の情報が明示されたことにより、好意的評価や接近動機が抑制された可能性は否定できない。

本研究の問題点として、操作チェックとして用いたWilliams（2009）の欲求の充足度と気分を測定する項目の得点に、排除操作の影響が反映されなかった点が挙げられる。しかし、分析結果をみると、部分的にではあるが排除操作の影響が対人記憶に表れており、本研究における排除操作が全く有効でなかったとはいえない。既述したように、これは自己報告による意識的指標を用いることの限界を示しているといえるかもしれない。特に、本研究の場合、過去の否定的出来事を想起した直後に欲求や気分について評定を求めているため、回答者に研究者の意図が伝わりやすく意識的に回答が歪められた可能性が大きい。今後はより巧妙な方法で回答者の内的状態を測定する工夫が求められよう。

結語

本研究では、社会的排除を受けた後、新たな他者の社会的脅威のサインが記憶されにくくなることを示した。この結果は、社会的排除を受けた場合、所属欲求を再充足するために、社会的つながりを再構築するように動機づけられるという社会的再結合仮説を消極的な形で支持するものである。しかし、この反応に、排除を受けた者の対人不安特性の高低による差異はみられなかった。本研究とは異なる実験方法を用いて、さらなる検討を重ねることが望まれる。

【付記】
本研究の内容の一部は、2010年に開催された、日本社会心理学会第51回大会において発表されている。

【注】

1）高木（2000）は、自由記述により対人的動機を測定し、回答の傾向から参加者を“接近群”、“回避群”、“現状維持群”の3群に分類している。高木（2003）が使用した尺度項目は、高木（2000）で得られた回答をもとにしたものである。

2）各項目の占める割合が0または1の場合は、田中・山際（2004, pp. 67）に基づき、便宜的比率を使用した。

【引用文献】

Alden, L. E., & Bieling, P. (1998). Interpersonal consequences of the pursuit of safety. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 53-64.

Atkinson, J. W., & McClelland, D. C. (1948). The effect of different intensities of the hunger drive on thematic apperception. *Journal of Experimental Psychology*, 38, 643-658.

Baumeister, R. F., Brewer, L. E., Tice, D. M., & Twenge, J. M. (2007). Thwarting the need to belong: Understanding the interpersonal and inner effects of social exclusion. *Social and Personality Psychology Compass*, 1, 506-520.

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.

Clark, D. M. & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment and treatment.* New York, NY: Guilford Press. pp. 69-93.

Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the bias map. In M. P. Zanna (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, vol. 40. San Diego, CA: Elsevier Academic Press. pp. 61-149.

DeWall, C. N., Maner, J. K., & Rouby, D. A. (2009). Social exclusion and early-stage interpersonal perception: Selective attention to signs of acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology*. 96, 729-741.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (2006). Universal dimensions of social cognition: warmth and competence. *Trends in Cognitive Sciences*, 11, 77-83.

Gardner, W. L., Pickett, C. L., & Brewer, M. B. (2000). Social exclusion and selective memory: How the need to belong influences memory. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 486-496.

Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.

Higgins, E. T. & Tykocinski, O. (1992). Self-discrepancies and biographical memory: Personality and cognition at the level of psychological situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 527-535.

Leary, M. R. (1983). *Understanding social anxiety.* Beverly Hills, CA: Sage Publication. (生和秀俊（訳）(1990). 対人不安　北大路書房)

Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1995). *Social anxiety.* New York: Guilford Press.

Mallott, M. A., Maner, J. K., DeWall, N., & Schmidt, N. B. (2009). Compensatory deficits following rejection: The role of social anxiety in disrupting affiliative behavior. *Depression and Axiety*, 26, 438-446.

Maner, J. K., DeWall, C. N., Baumeister, R. F., & Schaller, M., (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection? Resolving the “porcupine problem”. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 42-55.

Maner, J. K., Gailliot, M. T., Rouby, D. A., & Miller, S. L. (2007). Can't take my eyes off you: Attentional adhesion to mates and rivals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 389-

401.
村上史朗（2009）．測定の基礎　安藤清志・村田光二・沼崎誠（編）新版社会心理学研究入門東京大学出版　pp. 47-67.
Reeder, G. D, Kumar, S., Hesson-McInnis, M. S., & Trafimow, D. (2002). Inferences about the morality of an aggressor: The role of perceived motive. *Journal of Personality and Social Psychology*. 83, 789-803.
笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二（2004）．他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度（FNE）短縮版作成の試み―項目反応理論による検討―　行動療法研究，30，87-98.
Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
高木邦子（2000）．対人的動機と社会的相互作用経験が否定的対人感情の修正に及ぼす影響　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学，47，205-213.
高木邦子（2003）．否定的対人感情の修正に影響する動機・経験要因と個人特性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学，50，49-59.
田中　敏・山際勇一郎（2004）．ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法　第二版　教育出版　pp. 67.
Williams, K. D. (2009). Ostracism: A temporal need-threat model. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experiment Social Psychology*. Vol. 41. San Diego, CA: Elsevier Academic Press. pp. 275-314.
Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 748-762.
Williams, K. D., Wesselmann, E. D., & Chen, Z. (2007). Social exclusion. In R. F. Baumeister & K. D. Vohs (Eds.), *Encyclopedia of social psychology*. Vol. 2. Los Angeles, CA: Sage Publications. pp. 896-897.
Wojciszke, B. (2005). Morality and competence in person- and self-perception. *European Review of Social Psychology*, 16, 155-188.
矢田尚也・池上知子（2012）．対人認知における相補性の生起過程―社会的比較感情の役割―　人文研究：大阪市立大学大学院文学研究科紀要，63，9-26.

【付録】

本研究で使用した、新たな他者についての紹介文を以下に記載する。実線部分は温かさを示す行動項目、点線部分は冷たさを示す行動項目、下線のない部分は中立的な行動項目である。

前半

ほとんどの日、A.S.は学校へ向かう途中に缶コーヒーを買います。A.S.は電車に乗っている間、よく携帯のメールをチェックしています。その日は友人が大学を休んだので、A.S.は心配になって電話を掛けました。午前の授業の後、以前、ノートを貸してくれた友人がノートを貸して欲しいと頼んできましたが、A.S.はノートを貸しませんでした。

昼休みに、A.S.はよく食堂に行ってカレーを食べます。A.S.はゼミの仲間と一緒に食事をとろうとしません。また、ゼミの友人がA.S.に悩みを相談したとき、A.S.は気のない返事しかしませんでした。

学校から家に帰る途中に、友人が講義を休んだので、A.S.はその日のプリントを友人の家まで届けました。A.S.は家に帰ったとき、Eメールをチェックするのが日課です。友人が就職試験を受ける前日、A.S.は試験を受ける友人をメールで励ましました。

後半

A.S.は夏休みの間に自動車学校に通って免許を取りました。自動車学校で一緒だった友人がA.S.に分からないことを聞いてきたとき、A.S.はそれを知っているのに、自分も知らないと言いました。A.S.は冬

休みには毎年スノーボードに行きます。スノーボードをしていて友人がけがをしたとき、A.S.は病院まで付き添いました。

休みの日に、A.S.はよく自転車で公園に行きます。A.S.は友人と一緒に外出することが好きです。また、A.S.はたまに良いレストランに行きます。A.S.は友人とゆっくり会話することが好きです。

A.S.は家にいてもめったに家族と会話をしません。ある時、A.S.は試験勉強が忙しかったため、祖母の葬儀に参列しませんでした。

【2013年9月4日受付，10月29日受理】

Social exclusion and person memory: Moderating effect of trait social anxiety

TANAKA Hiroaki & IKEGAMI Tomoko

The social reconnection hypothesis asserts that people respond to social exclusion in an affiliative manner to restore their sense of belonging. Consistent with this hypothesis, previous studies demonstrated that social exclusion caused prosocial shifts in cognitive processes and interpersonal behaviors among those excluded. However, such prosocial shifts were not observed among people who have high levels of trait social anxiety when they were excluded. We examined whether the effect of social exclusion on person memory (i.e., memory for others' behaviors) was moderated by the levels of trait social anxiety. To manipulate exclusion, half the participants recalled and wrote down their past experiences of being excluded and the other half just wrote down their daily routines. Then all the participants read behavioral descriptions of a hypothetical person that contained signs of social acceptance (warmth) and threats (coldness) and formed impressions about the target person. The results from incidental recall tests showed that due to exclusion manipulation, participants recalled fewer signs of social threats from behavioral descriptions regardless of levels of trait social anxiety. Our finding indirectly supports the social reconnection hypothesis. The present study, however, failed to provide evidence for the moderating role of trait social anxiety in person memory of excluded people. We argue that this might be due to the methodological differences between the current study and the previous ones.